

「オスロ・レポート」定説の誤り

2002年2月8日付の「ニューヨーク・タイムズ」紙が、その定説の誤りを認めた。このスクープ記事を、日本の「読売新聞」は次のように転載して伝えている。

「ナチス・ドイツの原爆開発を指揮する立場にありながら、故意に開発を遅らせたとされる物理学者ハイゼンベルグ博士が、実は原爆開発を着実に進めていたことを示す、恩師（ボーア博士）の書簡が45年ぶりに公開された。

これまでの定説では、（ハイゼンベルグ）博士は1941年9月に、コペンハーゲン（デンマーク）を訪れて恩師のボーア博士と面会した際、原爆開発への良心の呵責を伝えたとされる。だが、ボーア博士は57年（になって）、面会時を振り返ってハイゼンベルグ博士に宛てた未送付の書簡の中で、〈研究所の私の部屋で行われた会話をはっきりと覚えている。ドイツでは君の指導のもと、原爆開発のための万事が進行していた、との確固たる印象を受けた〉と記していた」

この記事には多少の説明が必要だ。簡単にいえば、ボーア博士（英米連合軍）はドイツの開発能力をみくびっていたということだ。つまり、連合軍側の慢心ぶりを反省しているのである。記事を書いた記者は、これまで結社が書かせてきたそれまでの原爆定説を信じ込んでいた。記者は、ハイゼンベルグ博士が実はナチズム信奉者ではなかった、と信じるように仕向けられた原爆定説の「真実」、つまり、誰もがごく当たり前のよう信じてきた定説の誤りを、45年ぶりに公開されたボーア博士の書簡で知り、驚いて記事にしたのである。

定説はハイゼンベルグ博士が、ボーア博士と同じ反ナチズムの人だと信じ込ませるのに役立ってきた。だが、その定説は誤りだったかも知れないと懸念した記事なのである。